■　第 13 回『SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』―スポーツの多様な見方、考え方―
～2019 ラグビーW杯から始まる“ゴールデン・スポーツイヤーズ”。
その先陣を切るラグビーW 杯の「成功」で示したいスポーツの価値向上～

第 1 回「ラグビーW杯で、あなたは『何』を『見る』？
～『W杯を見る／オリンピックを見る』とはどういう行為を指すのか？～」
講師：玉木正之氏（スポーツ文化評論家）
日時：2019 年 6 月 27 日（土）18:30～20:00
会場：神戸国際会館セミナーハウス

今年で 13 回目となる『SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』。スポーツ界の知見豊かな方々を講師にお招きし、スポーツの在り方や人材育成のポイントを学ぶべく今期も開催して参ります。今期は、2019W 杯から 2020 東京オリンピック・パラリンピックへと続く国民的なスポーツの関心・熱気の高まりを、どう神戸のスポーツ文化に結びつけていくのか？を念頭に展開する予定です。特に、ラグビー、サッカー、アメリカンフットボールの三種フットボールが盛んなことから「フットボールタウン」を標榜する神戸にとって、2019 ラグビーW 杯神戸開催のレガシーをフットボール界全体で共有し、どう次世代に繋げていくかは、今から議論しておかなければいけない大きなテーマといえます。フットボールタウン KOBE の未来を見据え、スポーツを“する”“みる”“支える”をより身近な「文化」にするためにも、スポーツの価値向上への議論を重ねていきたいと考えています。

その初回となる今回、『SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』の顔ともいえる、スポーツ文化評論家の玉木正之氏を講師にお迎えし、ワールドカップを見るとはどういうこと？ オリンピックを見るとはどういうこと？はたまた、そうしたスポーツの見方を超えた「モノノミカタ」について語っていただきました。

冒頭、玉木氏から自身の記憶に刻まれたオリンピックにまつわるエピソードが語られました。まずは、1964年の東京五輪時、記録映画作成のためにカメラをまわしていた市川昆監督から聞いたエピソード。駒沢競技場で撮影していた市川昆監督は、和服姿の女性たちに、こう尋ねられたのだそうです。「すみません。オリンピックはどこでやっていますか？」その目の前でサッカーの競技が行われていたにも関わらず,,,。これを機に、「オリンピック（を見る）とはなんだろう？」と考え続け、市川監督は名作「東京オリンピック」を完成させたわけです。

続いて、過去に6回もオリンピック取材をしたことのあるサッカージャーナリスト・金子達仁氏のエピソードについて。何度となくオリンピックを見てきたスポーツジャーナリストである金子氏が、現地へ行かなかったアテネ五輪を観戦して「オリンピックって面白いですね！」と言ったのだとか。仕事としてではなく、一視聴者、一スポーツファンとして観戦した故のコメントということでしょう。

さらに、玉木氏自身の1964年東京オリンピック時の記憶を語ります。当時、京都に3台しかなかったカラーテレビのうち、2台が電器屋さんをしていた玉木氏のところにあったそうで、60～70人もの人が押し寄せ、テレビでオリンピックを見ていたというのが、玉木氏の印象に残るオリンピックの光景なのだそう。

これらのエピソードを通し、「何を見るか？」「何が見えるか？」というのは、見る人の態度や気持ち、環境が大きく影響すると玉木氏は言います。では、人によって、はたまた、その人の、その時の気持ちや環境で見るものや、見えるものが違うのであれば、スポーツ現場で仕事をしている人の見方はどうなのか？「見る技術」とは？ということで、今回の講座では、スポーツ文化評論家として長きに渡り、「スポーツを見る」ことを生業としてきた氏の「見る」テクニックを少し披露していただきました。

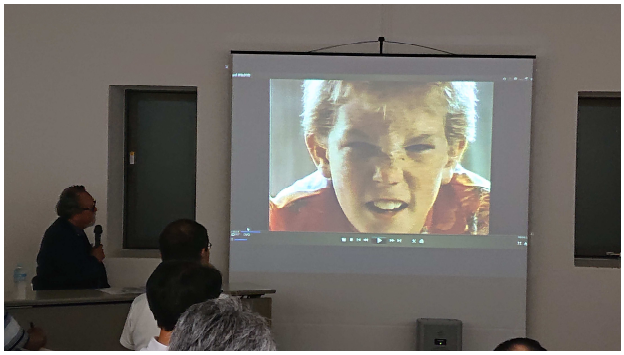
記者として駆け出しの頃、「先輩から『画面の真ん中を見てるバカがおる。四隅を見ろ！』と言われたのが実に印象的で、ジャーナリスティックな技術であり、基本」と氏は言います。これに通じる話として、SCIX 理事長である故・平尾誠二氏と生前親交の深かった、元サッカー日本代表監督・岡田武史氏（現・株式会社今治．夢スポーツ代表取締役）との会話を紹介。

岡田氏「グラウンドをどんな風に見てる？」

平尾氏「バ～っと見てますわ」

岡田氏「うん、そや、そやな」

平尾氏の「バ～っと」という表現が、岡田氏にも通じていることに驚くと同時に、代表監督経験のある二人ならではの現場の見方を象徴したシーンと、玉木氏は振り返ります。



そして、ここからは、インテリジェンス講座には珍しく、実践演習的な内容がスタート。玉木氏が大学のスポーツライター育成講座で実際使用している映像資料を用いながら、「見る技術」を学びます。まず、最初の課題は、MLB・ニューヨークメッツのプロモーションビデオを見ながら、見たことを 100 個書き出すというもの。学生に

なったかのように、必死にメモを取りながら映像を見る講座参加者の姿も見られました。

実際の授業では、次の課題として、書き出した 100 個の項目を 4 つに分けるという作業をするそうですが、今回は、映像の中のシーンがあらかじめ書き出され、4 つのカテゴリーに分けられた資料を受講者に配布。（以下一部抜粋）

A.・子供のファンが出演。　・子供とメッツの選手がカードで交流　・好プレイの連続
・女性のボールガールも登場　・黒人選手･白人選手がロッカーで交流　……etc

B.・メッツは NY の地域に密着したチーム　・ファンとの温かい交流が感じられる
・観客席とフィールドが一体化している　・チームの雰囲気が楽しく明るい
・市民ぐるみでチームを応援している　・球場へ行けば楽しめる　……etc

C.・音楽のテンポが良い　・Let’s go! Mets go!　という言葉の繰り返しが頭に残る
・画面の切り替えが早い(1 コマ最長 5 秒強)　・映像が飽きさせない　……etc

D.・1980 年代の選手は今の選手よりも痩せている
・昔の大リーガーはマッチョが少ない　・1980 年代はボールが飛ばなかった？
・日本のプロ野球に較べて応援が温和しい(派手だ／整然としている)　……etc

この資料を見ながら、4 つのカテゴリーはどういう分類がなされているかを考察します。C はプロモーションビデオの構成や見せ方についての類で、「見せる技術を見る側が見抜いている」という群、そして D は当時と現在、メジャーリーグと日本のプロ野球といった比較などにより「見る者が発見した」類と玉木氏が説明。「では、A と B はどういう内容にカテゴライズされていると思いますか？」と、ここで玉木氏から受講者へ質問。積極的に挙手し、自分の意見を述べる受講者たち。「A は目に見えること。B は目に見えないこと」という回答の後、さらに、「では、A と B それぞれを〇〇的という言い方にすると？」という質問が投げかけられます。この問いには様々な答えが飛び交いました。答えは「A が具体的、B が抽象的」。

演習を終え、この演習から見えてきたこととは一体何か？　「具体的なものを見て、無意識的に抽象的な判断をする。これが見る技術。この映像の作り手はどういう意図があったのか？抽象的な意図があり、それを具体的なことによって表現している。『見る』と『作る』という行為は一体化する」と玉木氏。これを受けて、話題は映画に。「映画は一言で言えることしか作ってい

ない」。日本映画界を代表する巨匠のひとり、大島渚監督の言葉を紹介。世界的に大ヒットしたハリウッド映画「タイタニック」を例に、玉木氏が一言でこう表します。人生は儚い。でも、愛はある。確かに一言で表現することができます。では、冒頭で触れた、市川昆監督作「東京オリンピック」は、どういう意図のもと作られたのか？市川監督が表現したかったこととは何なのか？ 一週間ぶっ通しでカメラをまわし、記録した映像を 2～3 時間程度にまとめるにあたり、「これは記録映画であるが、単なる記録映画ではない。ドキュメンタリーといえど、映画を作っているのだから！」という想いで作っていることがうかがえると玉木氏。劇中、背伸びする観客の足下や、警備にあたる警官たちが観戦する姿が映し出され、オリンピックに熱狂するシーンがある一方で、恋人たちの仲睦まじいシーンや、お母さんが子どもに放尿させるシーンが挿入され、これらはコンテにも残っているそうで、意図して挿入されていることが伺えます。その意図を映画から読み取らなければいけないと玉木氏は強調。「スポーツは楽しい。凄い。でも、スポーツが一番ではない。オリンピックよりも大切なことがある、ということを表現しているのではないか」と。

このように、製作者の意図を読み取る技術論を知っていると、より一層、スポーツやビッグイベントを見るのが楽しくなると氏は言います。「人間は自分の見たいものしか見えない」。ジュリアス・シーザーの言葉を引き合いに出し、「見たいものも、見えないものも見る」という意識で見るといいのではないか？と提言。

一方で、スポーツをする、したことがあるその経験が弊害になることがあると指摘。経験があるが故に、自分ベースな視点になってしまう傾向があるのだとか。（経験したことのないこと、経験したことのないレベルを）想像することが重要であり、見えないものを見ようと努力することで視野が広がると、想像力の大切さを訴求します。

「スポーツを見る」ということは、人間の営みであり、いい音楽を聴いた時と同じ心地よさがあると氏は言います。スポーツ評論家として、これまで数々の競技や大会を見続けてきた氏ゆえ、「今まで見たスポーツや大会で一番面白かったのは何ですか？」という質問をよくされるのだそうですが、その質問に対し「子どもの運動会」と答えたのだとか。この返答に「それはズルイ！」と言われたそうですが、一所懸命走る子どもたち、そしてその子どもたちを必死に応援する保護者ら、まさに「子どもの運動会」こそが「スポーツをする」、「スポーツを見る」の真髄が集約されていると言えるのかもしれません。

今回の講座の内容をふまえながら、9月開催のラグビーW杯、そして来年の東京オリンピック・パラリンピックを見ると、これまでとはまた違った楽しみ方ができるのではないでしょうか？これを機に、皆さまのスポーツの見方、楽しみ方が広がれば幸いです。

今回はG20大阪サミット開催と重なり、交通機関などの制約もあるなか、多数の方にご参加いただき誠にありがとうございました。次回、7月27日開催予定の講座は、SCIX理事・美齊津氏が「今、ラグビー記事を書かせたら右に出る者は居ない！」と太鼓判を押す、朝日新聞スポーツ部記者・野村周平氏と、昨期トップリーグ王座奪還を果たした、神戸製鋼コベルコスティーラーズ チームディレクター・福本正幸氏によるクロストーク。「平成最後のラグビーチャンピオンとして迎えるW杯日本大会。そこから見えるKOBEのラグビーと日本ラグビーのこれから――。」をテーマに語っていただきます。次回も多くの方のご参加お待ちしております。

（レポート　中野里美）

スポーツ振興くじ助成事業